

その律法は愛

[マタイによる福音書 5章 17～20 節]

「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思っはならない。廃止するためではなく、完成するためである。はっきり言うておく。すべてのことが実現し、天地が消えうせるまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない。だから、これらの最も小さな掟を一つでも破り、そうするよようにと人に教える者は、天の国で最も小さい者と呼ばれる。しかし、それを守り、そうするよように教える者は、天の国で大いなる者と呼ばれる。言うておくが、あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない。」

[1] 「神様の思い」を飛び越えてしまう私たち

教会というものは不思議なもので、その教会の「カラー」といったものを持つことがあると思います。その「地域性」であったり、その教会に集まる人々が作る交わりであったり、色々な要素があるのだと思います。そして、ともすると私たちは「あの人は〇〇教会に相応しい」とか「〇〇教会の人らしくない」などと言ってしまうことがあるかも知れません。悪気なく、です。けれど、ちょっと考えてみると、例えば、「あの人はイエス様に相応しい人だ」とか「相応しくない人だ」と言ったらどうでしょうか？—とてもおかしい言葉ですよ。誰がそれを決められるの？

いや、その問い自体がどこか歪んでいるような気がします。けれども、「相応しい」・「相応しくない」という考え方は、いつも私たちの心に根深くあって、いつしか私たちを分断してしまうのです。

これが「宗教」の怖い点かと思ひます。「神様の思い」ということをいつしか飛び越えて、「自分の価値」で色々なものを判断したり、感情的に「あれはダメだ」と団体や人を裁いてしまうことが起こりやすいです。それは逆説的に言うならば、「信仰」というものが自分にとってとても大事なもので、自分の生き方そのものに関わってくるからです、早急に黒白とか○か×かを付けてしまいたくないのではないかなと思います。けれども「イエス様を信じて生きる」ということは、人を分断して生きるのではなく、むしろその反対なのではないだろうか、そんなことを思わされています。

[2] イエスは「評論家」ではなく、本当に「生きた人」

今日の箇所はマタイによる福音書の 5 章です。先週の 4 章はイエス様は悪魔の誘惑に遭われるという所で、まだ荒れ野におりましたが、今日の箇所では既に公の場に現れ、多くの人々に宣教をされています。5 章から 7 章は「**山上の説教**」とも言われますね。これらの言葉は、民衆にとって全く新しい教えとして深く心に響き、イエス様は一気に「時の人」と言いますか、様々な場所で、様々な人々に語られ(それが編集されて「山上の説教」として纏められたとも言われます)、いつも多くの人々がその教えを聴こうとやって来たのだと思います。

面白くないのは、当時の**律法学者やファリサイ派の信仰者**たちです。彼らは幼い時からずっと**律法に忠実たらん**として生きてきた人々です。**律法**とは、**旧約聖書における神様の言葉**です。シナイ山でモーセが神様から与えられた**十戒**がその中心です。彼らは、その多くがそれらを自分の人生の土台にして生きて来た、とても真面目な人たちで、それを学んだり教えたりすることを生業にしていたり、また、最高法院の議員にもなっていた者もいるというように、律法に生きることが、自分の生そのものであった人たちでした。その彼らにとっては、イエス様の言動はとても驚きだったのだと思います。イエスという存在が、きっとその言葉には驚き、感銘を受けながらも、このままでは秩序が破壊されると思ったのでしょうね。特にイエスは律法無視とも思える、**安息日に病人を癒されたり、律法においては「汚れた者」とみなされていた重い皮膚病の者や障碍者、悪い霊に憑かれたと思われる者たち**に近寄り、「清くなれ」とか「あなたの罪は赦された」と救いを宣言している、**これは律法の破壊者だ、神を冒瀆する輩だ**と律法学者たちは思いました。それは、自分たちの存在基盤にも関わることだったのです。

けれどもイエス様は今日の所でこのように言われました。—「**わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思っはならない。廃止するためではなく、完成するためである。はっきり言うておく。すべてのことが実現し、天地が消えうせるまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない。**」

イエス・キリストは、「アンチ律法主義者」かと思っていたら、とんでもない。「すべてのことが実現し、天地が消えうせるまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない」、「**わたしは律法を完成(成就)させるために来たのだ**」と言うのですね。「**律法の完成者・イエス**」です。これはどういうことのでしょうか。

皆さんも不思議に思っことは無いでしょうか。イエス様は「**文書**」を何一つ残してはいません。残したのは、イエス様の弟子たちや、信徒の群れが語り継いでいったのですね。何故か。主は「**文筆家**」「**評論家**」ではないのです！ 彼は実践

家（「実践家」とはちょっと語弊がありますが）と言いますか、本当に「生きた人」だったのです。「生ける神(の子)」だったのです。書齋の人じゃなかった。だから言葉以上に、彼の生きざま、わがが本当に革命的だったのです。律法学者たちはイエスを「神を冒瀆する者だ」と言いましたが、それはあまりに彼の生きざまが自由だったかからです。ただ「愛」に貫かれていたからです。律法主義の誤りというのは、その文字(ペーパー)に拘るあまり、愛を失っていたのだと思います。

[3] 「神の業」は十字架の愛に集約されて

一ヶ所、ヨハネによる福音書の 10 章を見て頂きたいと思うのですが、イエス様の業を受け止めきれないユダヤ人たちとの衝突が記されています。10 章 31 節以下をお読みします。—「ユダヤ人たちは、イエスを石で打ち殺そうとして、また石を取り上げた。すると、イエスは言われた。「わたしは、父が与えてくださった多くの善い業をあなたたちに示した。その中のどの業のために、石で打ち殺そうとするのか。」ユダヤ人たちは答えた。「善い業のことで、石で打ち殺すのではない。神を冒瀆したからだ。あなたは、人間なのに自分を神としているからだ。」そこでイエスは言われた。「あなたたちの律法に、『わたしは言う。あなたたちは神々である』と書いてあるではないか。神の言葉を受けた人たちが、『神々』と言われている。そして、聖書が廢れることはありえない。それなら、父から聖なる者とされて世に遣わされたわたしが、『わたしは神の子である』と言ったからとて、どうして『神を冒瀆している』と言うのか。もし、わたしが父の業を行っていないのであれば、わたしを信じなくてもよい。しかし、行っているのであれば、わたしを信じなくても、その業を信じなさい。そうすれば、父がわたしの内におられ、わたしが父の内にいることを、あなたたちは知り、また悟るだろう。」

37 節で、主イエスは「どうして『神を冒瀆している』と言うのか。もし、わたしが父の業を行っていないのであれば、わたしを信じなくてもよい。」と仰っています。イエスの業は、父なる神様のわざそのものなのだと。わたしを通して父なる神がその御旨を表しているのだから、わたしを信じる事が出来なくても、わたしの行なっている業を信じなさいと言っているのです！ これは凄いです。

主イエス様が父なる神様から託された業、それは最終的にあの十字架に集約されて行きます。それは「愛」の極致ですよね。私たちは神様の前に皆罪人なのです。律法に照らされれば照らされるほどそれが分かる。神の言葉は鏡であり、剣です。誰もが神様に裁かれなければならない存在です。けれども主イエスの到来によって新しいステージが開かれたのです。私たち罪人の罪をご自分が背負うということ。ご自分が身代わりになって死と裁きを受けることで、私たちには、神と共に生きる永遠の生命を与えるということ。それが「神の業」なのですね。旧約聖書の

律法全体は、このメシアを待望していたのです。イエスは、「神の言葉の成就(完成)」そのものなのです。

今日の箇所で「あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない」とありました。心配でしょうか？ いいえ、大丈夫です！ イエス・キリストご自身が私たちに義の衣を着せて下さいましたから。私たちは確かに神様に受け入れられているのです！

[4] 神様の桁外れの愛に根差して

最後に、「教会」とはどういう所か。それを述べている文章をご紹介します。終わりたいと思います。これは、イギリス国教会(聖公会)のカンタベリー大司教が語った言葉です。バプテスト教会も、もとはこのイギリス国教会が親教会とも言えるのです。まあそこから出た訳ですが、現代の世界の教会は、とてもゆっくりかも知れませんが、今段々と一致への方向を歩んでいるように思います。現在のコロナの出来事も、もしかしたら地球規模の助け合い・また、それこそアフガンで中村哲さんが生きざままで示して下さいったような「共に生きていく」ということを神様が促してくれている、そういうサイン(時のしるし)なのかもしれません。

西原廉太牧師が書かれた『聖公会が大切にしてきたもの』からお読みします。

「2007年の3月にヨハネスブルグで世界聖公会アングリカン・コミュニオン(聖公会)の宣教会議が開かれました。私たちの世界聖公会は、現在、性をめぐる様々な倫理的問題をめぐって深刻な分裂の危機にあります。しかしこの会議で世界聖公会は世界各地の紛争や貧困、暴力や環境問題などを解決するために、内部的な分裂をしている場合ではないことに改めて気づかされました。この会議で説教をしたカンタベリー大司教・ローワン・ウィリアムズはこう語りました。

—『聖歌隊の指揮者にとって最も重要な任務は、大声を出して歌う人や、音を外している人に注意を与えることではない。その任務とは、声の出していない人、聴き取れないほどの小さな声の人の存在を、敏感に感じ取れることだ。そして<あなたの声が聴こえなければ、この聖歌隊は無い方が良いのだ>と語りかけることなのだ』と。

正にこのために生きられた神の子が、主イエスなのではないでしょうか！ 全ての律法(神様の言葉)は、「独りも滅びないで永遠の生命を与える」神様の桁外れの愛がその奥にあるのです。私たちのこの教会の交わりも、誰もが貴い神の子であると、その主イエス様が開いて下さった愛に深く根差したものであり続けてゆきたいと思います。そして、この年、世界のこと、日本のことも勿論ですが、身近なお一人お一人のために祈り続けていきましょう。お祈りを致します。

